

聖書:ルカの福音書14章15~24節

説教:神の国の食事

はじめに

私ごとですが、顔面麻痺になっていろいろ不都合があったなかで味覚異常というものがあります。甘いとかしょっぱいはわかって、細かな味のニュアンスがわかりにくく、金属を舐めているような感覚があります。それで初めて、味覚というものが神が与えてくださったすばらしい贈り物だったのだと気がつきました。聖書にはイエスがいろいろな人々と食事をする場面が何度も出てくるのですが、以前はそのことを深く考えることはありませんでした。ところが味覚の大切さがわかってくると、食事ということにも深い意味があると考えようになりました。今日のところにも食事のことが出てきます。詳しく見ていく前に、いつものようにここまでのあらすじを振り返ります。

イエスが、ある安息日にパリサイ派の指導者から食事に招かれたとき、前の席に座っていた水腫の人を抱いて癒やして家に帰らせました。そのことをきっかけにして、結婚の披露宴ではどこに座るべきなのか、また食事にはどのような人々を招待すべきなのかをイエスは語り始めます。披露宴では末席に座りなさい。食事には貧しい人を招待しなさい。いずれも当時の常識とはまったく正反対なことを言い出したのですから、パリサイ派の人々はこれを聞き、顔を真っ赤にして腹を立てたでしょう。それが前回までのあらすじとなります。

## 1 神の国の食事

### 1) 誰が招かれるのか

そんな緊張した雰囲気の中で、ある一人の人がイエスにこう言います。15節。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう。」

これがどんな意図で発言されたのか、二つの可能性が考えられます。一つ目は、イエスが語る教えに心から感動して、真っ正直な心で語った。でも、この席に着いていたのはすべてパリサイ派の考えに賛同する人たちですから、この可能性はない。ということは、イエスを試そうとして、わざとこのようなことを語ったこととなります。どんなふうにしたのか。ユダヤ人は、救いの日に神の国で食事をする信じておりました。それはよいのですが、そこで問題になるのは、神の国の食卓に招かれるのは誰なのかです。当然、神は正しい者だけを招くはずで、では誰が正しい人なのか。もち

ろん神の律法を守る者であって、自分たちこそ招かれる資格がある。「神の国で食事をする人は」と、ちょっと距離をとった言い方をしていますが、ようは自分たちがそこに招かれている幸いな人たちだと言いたいのです。イエスはこの発言をした人に向かって、一つのたとえを語り始めます。

### 2) 「パンを食べる人」(15節)

その内容を見ていく前に、一つだけ15節の発言の中に不思議な表現があることを指摘しておきます。日本語訳では、「食事をする人」と訳しているところは、直訳すると「パンを食べる人」となります。もちろん、パンを食べることは食事をすることの象徴的な表現ですからなんの問題もありません。しかし、「食事をする」という表現はほかの言い方でも沢山できます。なぜこだけ「パンを食べる」という表現をするのか、気になります。そのことはまた後で触れることとなります。

## 2 盛大な宴会のたとえ

### 1) 招待された人たち

さて、たとえ話の始まりはこうです。16節。「ある人が盛大な宴会を催し、大勢の人を招いた。」この盛大な宴会というのが、神の国の食事のことであることはすぐにわかるでしょう。家の主人はあらかじめ招待する人のリストを作り、今度宴会を開くので是非来ていただきたいと招待状を送っていました。やがて宴会の準備が整ったので、しもべを遣わして「さあ、おいでください。もう用意ができましたから」と知らせます。ところが、皆次から次へと、いろいろを理由をつけて招待を断っていく。最初の人は「畑を買ったので今から見に行かなければならないので」と言い訳をし、二番目の人は「買った牛の状態を見るためにこれから出かけなければならぬ」と言う。三番目の人は「結婚したばかりなので」と言ってこれも断る。

さあ、皆さんどう思いますか。確かに、私たちがこれと似たような経験をする可能性があります。ある人から食事の招待をいただいていたのに、思いがけなく重要なことが起きてしまい、どうしても招待を断らなければならない。そういうとき、どうなるでしょう。行けなくなってしまった事情を

相手に説明しながらも、非常に申し訳ない気持ちになるでしょう。

ではこの三人はどうだったのか。「どうぞご容赦ください」と言って、申し訳なきようにしているようにも見えますが、どうも様子がおかしいのです。宴会の日時は、あらかじめわかっているのです。畑を買うなら、宴会が予定されていた日を避けて、別の日にできたはず。牛を買うのもそうです。宴会のある日にわざわざ牛を買う理由がありません。三番目の人もそうです。宴会の招待があったとき、結婚式の日取りと重なるかどうか、最初からわかっていたはずで、重なっていたなら結婚式の日取りを前後にずらすか、それができなければ、あらかじめ招待をお断りする。それが当たり前です。ところがこの人は、これから宴会が始まりますというときに、明らかに不自然な理由を告げて断ってしまう。おかしいですね。つまりこういうことです。この人たちは事前に相談して、主人に恥をかかせるためにいきなり招待を断った。

## 2) 招待されていなかった人たち

ですから、これを知った主人が怒り出すのは当然です。では、彼らに報復したか。いいえ、しない。その代わりにしたことはこうでした。21節後半。「急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい。」

前回の箇所13節で、イエスが食事に招くときは、「貧しい人たち、からだの不自由な人たち」を招きなさいと語っていましたが、それと比べてみてください。内容は同じです。ですが、招き方がちょっと変わっています。招待状を配って「宴会に是非来てください」と伝えたのではなく、いきなり予告なしで「いますぐ宴会に来てください」と言うのです。それだけではない。まだ席に余裕があるのを知った主人は、23節後半でこのように言います。「街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいにしなさい。」

このたとえ話からいくつかのことがわかる。まず一つ目。神の食事の席ですが16節に、「盛大な宴会」とか「大勢の人を招いた」ありますが、手当たり次第に宴会の席に座らせてもそれでもまだ余ったというのですから、宴会の席は相当の数が用意されている。二つ目。そこに誰が座ったか。貧しい人たち、からだの不自由な人たちと一緒に、「街道や垣根のところにいる人たち」も座つ

た。これは異邦人のことを指していると言われます。三つ目。その席にはどんなふうに招待されるのか。あらかじめ招待状が届くのではなく、ある日突然いきなり招待される。四つ目。どんなふうに招待されたか。無理にでも、です。

## 3) 誰が食事を味わうのか

報復する代わりにこのようなことをするとは、不思議と言えば不思議、また驚きですが、それはそれとして、宴会の主人が最後に24節でこう語っていることが気になります。「言うておろが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。」

自分こそ神の国の食事に招かれる幸いな者だと思ひ込んで人に対して言われたことばではありますが、こんなことを言われると、自分は神の国の食事に招かれているのだろうか、と不安になります。もう一度確認します。「あの招待されていた人たち」は何をしたのか。先ほど見たとおり、主人に恥をかかせるために招待を断った人たちです。実際の話しで言えば、パリサイ派の人々はイエスを食事に招いて、罾にかけ、恥をかかせようとしたわけです。私たちの救い主、神の国の食事を用意して下さる主人に対してこうした。神が怒ったので食事を味わえなかったのではない。招待されていたのに、その招待を自ら断った。だから食事を味わえない。当然といえば当然です。

## 3 イエス・キリスト

### 1) わたしはパンです (ヨハネ6章48~50節)

15節は直訳すると、「神の国でパンを食べる人は、なんと幸いなことでしょう」となると言いました。自分たちこそパンを食べる資格がある、そんな傲慢な心を持った者が語ったことばでした。

でもこのことから考えさせられるのです。イエスはどのような食事を私たちに与えて下さったのだろうか。イエスはこう言われました。ヨハネ6章48~50節。「わたしはいのちのパンです。あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。」

世の中にはおいしい料理はたくさんありますが、どれを食べても結局私たちのいのちには限りがあり、いつかは死ぬこととなります。しかし、イエスが与えて下さる食事は違う。これを食べたなら死ぬことがない。いのちのパン。神の国の食卓にもこのいのちのパンがあるはずではないですか。イエスご自身の御からだ。イエスご自身が、ことば

のとおり身を削って私たちにお与えになったパン。それを私たちはいただきます。ですからとても、「パンを食べる資格がある」などとはとても言えるものではないことはおわかりでしょう。

## 2) 食べる資格のない者を招く

誰でもそうだと思うのですが、最初から私は救われる資格があると思って洗礼を受ける人はいないでしょう。むしろ、このような者が救われていいのだろうか。そんな戸惑いを覚えながら、イエスの十字架を信じ、ユダヤ人でもなければ聖書も知らなかった異邦人である者が救われた。それは、ある日突然神の国の食事に招かれたようなもの。それまで私たちはどこにいたのでしょうか。世の中からはじき出されてひとりぼっち。町の真ん中ではなく、街道や垣根のところ立っていたような者だったのです。神はそんなところまで捜して来てくれて、無理矢理に宴会の席に座らせるようにして、神の国の食事を味わう者としてくださいました。

神の目からご覧になるなら、私たちは貧しい者、体の不自由な者、障がいのある者、神の食卓に座ることなどふさわしくない者でした。私は神の食卓座る資格のない者ですと告白するとき、神は語ってください。「あなたはわたしの食卓に招かれています。どうかいますぐ来てここに座ってください。あなたの罪は十字架によってきよめられていますから、安心してここに座り、ともに喜んでください。」

神の国の食事に招いてくださる主に感謝いたします。